

アボリジニの都市民化とその特徴

シドニーの場合

鈴木 清 史

目 次

はじめに

I シドニーのアボリジニの形成期

移動の契機

理由

出身地

住居地域

社会・経済的地位

II 今日のシドニーのアボリジニ

人口の特徴

社会・経済的地位

住居地域

都市アボリジニの言語

近年の都市への移動

III まとめ

は じ め に

オーストラリア先住民とは、アボリジニとトーレス・ストレイト・アイランダー（トレス海峡諸島島嶼民）の総称であり、その人口は227,645人〔ABS 1987〕を数える。そのうち、アボリジニ人口は206,010人である。

このアボリジニの人口に関して最も注目すべき特徴は、その分布が都市に偏っていることである。例えば、オーストラリア統計局が主要都市（major urban）と分類する人口10万人以上の都市で生活する割合は、アボリジニ全人口の約23.4%である。人口1,000人以上10万人未満の地方都市で生活しているアボリジニの人口と合算すると、アボリジニ全人口の66.5%が、都市の住民ということになる。

このように都市でのアボリジニの存在は極めて歴然としているにもかかわらず、都市に住むアボリジニへの関心はあまり高いとは考えられない。本稿では、最近筆者がフィールド調査を行なっているシドニーのアボリジニに焦点を当て、その形成をたどり、そして今日シドニーで生活しているアボリジニをめぐる状況を俯瞰的にとらえオーストラリア社会における

アボリジニの今日的一局面を描き出すことを目的とする。

ところで本論にはいる前にいくつかの留意点を指摘しておく必要がある。一つは、都市のアボリジニの存在は厳然たる事実として周知されているにもかかわらず、過去の研究資料が限られていることである。したがって、本論では、限られた過去の研究調査や資料に頼らなければならないこと。

第2に、近年のオーストラリア統計局発行の資料ではアボリジニあるいはトーレス・ストリート・アイランダーの統計は、十分に提供されていないことが多く、必ずしもテーマとするシドニーだけの資料が直接的に明示し得ない。

最後に、オーストラリア統計局の定義では、人口10万人以上の都市を主要都市としているが、本稿で言及する「都市」は、基本的には人口規模100万人前後以上の州都規模の街をさしている点である。本稿では、シドニーのアボリジニの特徴を考察するため、オーストラリア国内のいくつかの都市に言及しながら、作業を進めていきたいと考えている。

I シドニーのアボリジニの形成

〔移動の契機〕

アボリジニが都市へ移動する現象が生じた遠因は、基本的には19世紀中頃に採用された「保護・隔離」政策である。この政策は、英国のオーストラリア入植当時採用されたアボリジニの「絶滅政策」による人口激減という現象の反動として採用された第二期の政策で、当時の宗主国英国の人道主義運動の結果として採用されたものであった〔鈴木 1986〕。

この政策はアボリジニの「保護」という名目を掲げ、アボリジニは白人入植者たちがあまり価値を見いださないような辺境へと強制移住させられ、隔離されたのである。その結果、アボリジニは一般入植者の眼には触れることはほとんどなくなったのである。しかし、「保護・隔離政策」が施行されたからといって、都市でのアボリジニ人口が皆無になったということは考えられない。英国人入植当初からアボリジニの「英国人化」は大きなテーマであり、アボリジニを対象とした方策が施された。例えば、シドニー西部のパラマッタ（Parramatta）地域に設置された原住民学校は、アボリジニに対して白人の教育を施し、白人社会への同化を促進する目的があった〔ibid. 1986〕。このことは、アボリジニが、白人入植者の近辺で生活していたことを示している。

正確な数は分からないが、少数のアボリジニは永々と都市で暮らしていたはずなのである。1967年のレファレンダム（国民投票）まで、アボリジニは国勢調査の正式な対象ではなかったため、統計には登場しなかったのであろう。したがって、アボリジニがオーストラリアの諸都市から完全に姿を消したというより、ある時期になって急にアボリジニが都市で目立つようになったというべきである。

さまざまな資料は、アボリジニの都市での顕在化が急激に起こったことを示している。例えば、1962年にメルボルンで調査したバーウィックは、その前年に行われた国勢調査の数値の1.7倍近いアボリジニを確認している [BARWICK, 1962: 26-27]。同じように、アデレイドの調査では、ゲイルは1950年から1964年までにアデレイドのアボリジニ人口は7倍以上の増加を見せていることを指摘している [GALE, 1972: 72]。同様にブリスベンでも1961年の国勢調査の結果の数倍のアボリジニ人口が研究者の手によって掘起こされている [SMITH 1967]。

ところで、シドニーに眼を転じてみることにしよう。

シドニーの場合を考察する際には留意しなければならないことがある。それは、シドニーにはその市街地域にアボリジニ居留地を有していることからアボリジニの存在は所与のものであった、という点である。ここで所与とは、シドニーはその市街地にアボリジニ居留地（ここではreserveではなくsettlementを指す）を有していたことを意味する。

シドニー地域のアボリジニ居留地は、ラ・ペルーズ (La Perouse) アボリジニ居留地と呼ばれ、シドニーの中心地から南東に約15キロメートル、南太平洋からボタニー湾への入口の北側に位置する。設立は1880年前後とされている [BELL 1961]。

その意味では、シドニー以外の都市のアボリジニの生活が過去30余年の歴史しかないのに対して、シドニーは都市に住むアボリジニの歴史が長いことが分かる。（しかしこれは驚くにあたらぬ。何故なら、シドニーのアボリジニには、1788年の入植の時点から白人と関わりがあるアボリジニが存在したのである。それは、筆者の最近の調査中の経験からシドニーのアボリジニの間ではあまり評判が善くないと思われる人物であるが、名前をベネロング (Bennelong) というアボリジニがいた。彼は、時の総督フィリップ船長が、捕えられた2名のアボリジニの内の一人である。一名は死亡したが、ベネロングは開拓されつつあったシドニーの白人居住地域で生活し、白人の生活様式を身につけ、英国に派遣され、当時の女王に拝謁しているのである。）

ラ・ペルーズの居留地は、'window dressing' settlement (モデルケース・セトルメント (居留地)) と呼ばれ、市内に位置することから、生活環境は他の居留地よりも恵まれていたとされている [PARBURY 1986: 115]。1950年代には既にシドニーでアボリジニの手工業製品の展示即売会等を実施し、白人社会の機構の中に入っているのが分かる [ibid.]。

ラ・ペルーズの居留地のアボリジニが非アボリジニ人口に囲まれながら生活してきたかという点、必ずしもそうではない。居留地自体は確かに非アボリジニ人口を周囲に持っているが、一旦ラ・ペルーズ地区に入ってしまうと、ほぼ均質の文化的背景を持つアボリジニの居住地だったのである。

アボリジニ以外の人口は言うまでもなく同じアボリジニでも他の地域からの流入は極めて少数である。住宅を所有しているアボリジニの割合も高いといわれていた。[[BEASLEY 1975: 143-164] (但し、彼女の調査の場合、サンプル数が決定石に少ないため自宅所有率については

一般化できるかどうかは不明)。

こうした事例は他の都市のアデレードやメルボルンのアボリジニとは明かに異質のものである。

さらに第二の特徴として考えられるのは、1960年代中期にシドニーのアボリジニを調査したビーズレイの報告書では、シドニーでもアボリジニの流入現象を見ることができると同時に、すでに第二世代の登場を見ることができることである。

ゲイルの調査は、100のアボリジニ世帯を抽出し分析、考察している。この点でアデレードで行なったゲイルが人界作戦を用い、できる限りのアボリジニを掘り起こそうとした調査と異なる。加えて、彼女のサンプリング過程は明確に示されていないため、どれほど一般化が可能かは疑問の残る点もある。

それにもかかわらず、その彼女の報告で最も注目すべきは、調査対象となった100世帯703名の人々のうちアボリジニでない30名を除いた673名中304名がシドニー生まれであったという点である [BEASLEY 1975: 140]。この304名の中にはラ・ペルーズ居留地のアボリジニも含まれているが、そこから抽出されているのは12世帯、83名であり、ラ・ペルーズ以外のシドニー生まれのアボリジニ数は244名である [ibid. 144]。同時期のアデレードの調査では、アボリジニ人口のほぼ全部が第一世代であったことを見ても、シドニーが他の諸都市よりも早くアボリジニの移動が起こっていたことが分かる。

[理由]

ではもともとシドニーの住民ではなかったアボリジニはなぜ都市へ移動してきたのであろうか。ビーズレイによれば、「就職」(34.8%)「子供の教育の機会」(14.9%)「病気治療」(6.5%)となっている [ibid. 154]。さらに、「理由不明」と「その他の理由」の2項目がそれぞれ18.7%と24.2%となっている。「その他の理由」とは「親戚を頼って」とか「夫からの逃避(!: 筆者注)」という多岐に富んだ理由を一つの項目に纏めたものである。これらのシドニーで指摘された理由をアデレードの場合と比較してみるとかなり対照的なのが分かる。

アデレードでは、「市内に親戚がいるから」「特に理由ないし」「里子」「病気治療」の4項目だけで全体の7割近くを占め、「就職」「教育」というのは1割程度である [GALE 1972: 87]。特に、アデレードの場合特徴的なのは居留地(親元)からアボリジニ児童を引き離し、アボリジニ市内で教育を受けさせる制度が存在していたことである。連邦政府のアボリジニ事務省事務次官を努めたチャールズ・パーキングも、その制度の中で親元から引き離され教育を受けた人である。[1987 参照]。

「市内に親戚がいる」という理由で起こる移動は、極めて通文化的な特徴であり、アメリカ・インディアンの都市への移動現象でも指摘されている。そして、その現象は“chain migration (連鎖移動)”と呼ばれている。この移動が、アデレード最大の割合を占めている

のには理由がある。それは、アデレードとアボリジニ居留地の近接性（proximity）という構造的特徴に起因しているのである。

アデレードを州都とする南オーストラリア州は、「保護・隔離」政策が採用された 19 世紀にアボリジニの居留地を設置した。それらは基本的には全州内に分散してはいるが、規模の大きな居留地はアデレードから半径 160 キロメートル程の範囲内でアデレードを取り囲むように存在している。

距離としての 160 キロメートルと言うと、居留地が設置された 19 世紀当時ならいざ知らず、モータリゼーションが日本よりよほど早く生じたオーストラリアの 1960 年代ではさしたる距離とは考えられないのである。したがって、アデレード市内に住む自分の親戚を頼ってアボリジニの人々が移動してきたとしても、それは極めて自然なのである。

つまり、アデレードのアボリジニの都市への移動の理由とシドニーのそれとを比較したとき、次の特徴を指摘できるのである。

シドニーのアボリジニ場合、地方よりも都市の方が供給できる可能性の高いサービスを期待してアボリジニが移動してきていると、既に述べたアボリジニの指摘した理由は、必ずしもアボリジニにだけ特徴的な理由とは言えず、大都市での可能性を求めて移動して来る人々に一般的にみられる理由と考えられるからである。

加えてアボリジニが「就職」の機会、また「子供の教育の機会」を求めて都市へ移動してきている点は注目すべきである。これらの理由は彼らアボリジニがオーストラリア社会での社会的移動の欲求の一つである、と考えることも可能なのである。

いずれにしても、シドニーのアボリジニの場合その移動理由はかなり明確化しており、多様性がある。これらの特徴を考えてみると、シドニーという街が、アデレードなどの州都と比較した場合、アボリジニの社会的移動の欲求に呼応し得るような「何か」を提供する可能性のある街とアボリジニ考えられていたのかも知れない。

〔出身地〕

アボリジニの都市への移動が極めて顕著な社会現象であった 1960 年代の調査や研究資料によると、都市へ移動して来るアボリジニの出身地は同州内の居留地が中心であった。既に述べたように、アデレードでは市内から半径 160 キロメートルの範囲に位置する 5 つの居留地を出身としている場合が大多数を占めていた。ここでは、都市と居留地の近接性という構造的要因が大きく機能していた〔詳しくは GALE 1972: 80〕。

同じ州内の都市にアボリジニが移動するのには理由がある。それは、1972 年に労働党が政権に就き、連邦政府内のアボリジニ政策を一手に担当するまで、アボリジニ政策は州政府の管轄であった。したがって、同じオーストラリア国内でもアボリジニへの対応には州によって違いが存在していた。そして、それ故に州境を越えたアボリジニの移動には制約があ

り、アボリジニの人々は都市を目指すなら、自分の出身の州内の都市へ移動する場合が多かったのである。

この現象はシドニーでも同じで、シドニーを州都とするニュー・サウス・ウェルズ州内出身のアボリジニは、ビーズレイの調査でも大多数を占めている [1970: 142-143]。具体的には、シドニーから西方のブルーマウンテンの東側までの出身者が最大多数を占めているが、同時にシドニーへ移動して来るアボリジニの中には、数百キロメートル、あるいは応々にしてそれ以上の距離をはるばるやってきた人々もいる。さらに他の州出身者も少数ではあるがやはりいるのである。これを、調査時期のほぼ同じのアデレードと比較してみた場合、南オーストラリア州政府の管轄下にあった地域以外の出身のアボリジニが確認されるのは、1981年に同じくゲイルが行ったアボリジニの経済的状況の調査によってである [GALE 1982]。

この意味において、シドニーではアデレードよりも10数年以上も早くさまざまな地域からアボリジニを吸引していたということが理解できるのである。そして、アボリジニのシドニーへの移動理由と彼らの出身地を併せて考慮した場合、シドニーという街の特質、もしくは他の州都との相違が浮かび上がって来る。その相違というのはシドニーの持つコスモポリタンの雰囲気、シドニー周囲を中心とするニュー・サウス・ウェルズ州内のアボリジニだけでなく、他の州のアボリジニまでも吸引していく、かつその吸引はアボリジニの社会的階層を登ろうとするインセンティブを提供し得る「何か」を秘めているようにも思われるのである。

そしてその「何か」を求めてのアボリジニの反応は、調査対象となったシドニーのアボリジニだけを取り上げてみても明らかのように、彼らの多くが既にシドニー生まれとなっているように、第2世代を登場させているほどの早さだったのである。

[住居地域]

さて、都市にやってきたアボリジニがどの地域に住居を構えたのであろうか。

既に、多くのアボリジニ研究が指摘しているように、彼らの伝統的な——社会的・個人的——生活は密接な親族関係によって成立していると言われている。白人との200年に及ぶ接触を経て、変容しているとは言うものの、伝統的色彩の濃い地域では依然として今日でも彼らは、我々外部の眼には極めて複雑に映る婚姻規則を持ち実践しているといわれている。

アボリジニの都市民化がおこって間もない1960年代、それもアボリジニだけが生活してきた居留地から都市へ移動してきてさほど時間の経っていない時点では、こうした彼らの親族組織に基づく社会関係が彼らの居住地域の選択に影響を及ぼさないはずがないのである。

事実、アデレードの調査では出身地を同じくするアボリジニ同士が近接し合って生活していることが指摘されている [GALE 1972: 98-114]。さらに、1980年のアデレードの調査で

も同じ結果が報告されている [GALE 1982: 77]. 興味深いことに、1982 年の調査では対象となったアボリジニの人々はほぼ全員がアデレード市民 (=定住者) となっているのであるが、彼らが調査時点の住所に落ち着くまでは、何度も引越しを繰り返しながら、親族同士が接近し合うようにするのである。そして、一旦お互いが近接し合うと引越しを止め、そこに定住するのである。したがって「親族同士が近接して居住しているところでは、引越しの度合いが低いのである」[GALE 1982: 102].

残念ながら、シドニーではこのような時系列の調査がなされていない。ラ・ペルーズという昔からの居住地を別にすると、アボリジニのシドニーへの移動が既に本格化してしまった 1960 年代中頃の調査では、シドニーへ移動してきた直後は市内の中心部へ、そしてしばらくすると外周部へ移動する [BEASLEY, 1970: 137-38].

外周部はシドニーの新興住宅街として住宅公社を中心に開発されている地域で、建設されている住宅は多くが個人所有用もしくは公社による賃貸用である。この地域の住宅に居住しようとした場合は、購入あるいは公社を通して入居申し込みの方法をとるが、どちらにしても、ある一定の条件を満たす必要がある。そのため、シドニー移動直後のアボリジニには、その条件を満たすことはできないことが多い。地方出身のアボリジニがシドニーの中心部へまず集まるのは民間の住宅が多いからである。

しかし、ピーズレイによると、一旦シドニーでの生活が始まり、その中で移動する場合には、それまで住んでいた地域よりはより評価の高い地域を選ぶ傾向にあるという。シドニーを取り囲む外周地域はその意味で、シドニー生まれのアボリジニの比率が高いと言われ、家族の構成も核家族化していると指摘されている [BEASLEY, 1975: 145].

〔社会経済的地位〕

既に述べたように、アボリジニの存在がオーストラリアの社会の中で正式に認められたのは、1967 年の国民投票によってである。それ以前はアボリジニは、「公式」にはオーストラリア国民ではなかった。

国民でないということは、さまざまな不遇にみまわれる。選挙権・被選挙権を行使できないのはもちろんのこと、教育にしてもさまざまな障害があった。さらに、アボリジニが都市へ移動してきた頃は、オーストラリア社会がそれまで経験したことのない勢いで、非英国系移民を受け入れていた時期で、受け入れ国オーストラリアは海外からのヨーロッパ系移民を低賃金労働者として優先雇用することができたのである。

そのため、「職を求めて」都市へ移動してきたアボリジニは、自分の期待が裏切られる状況を目の当たりにしたのである。確かに、1966 年の国勢調査報告では大多数 (84.7%) がなんらかの職に就いている [ABS 1966: 15]. しかし、職種は肉体労働であり、雇用は安定していない。国勢調査報告では所得レベルは判明しないが、ピーズレイのサンプリング調査では、

過半数をはるかに上回る人々が低所得なのである。

雇用が安定しない事実が反映してか、シドニーのアボリジニは自分たちが社会保障受給資格者であることを自覚していると言う [BEASLEY 1975: 181-183]。

アボリジニの経済的基礎の弱さと、彼らの社会的弱者としての立場が過去多くのアボリジニの貧困を取り扱った研究や調査で指摘されてきているが [例えば STEVEN 1972, WESTERN 1988, 鈴木 1986 等], その姿は都市へアボリジニが登場してきた当初から確認できる結果となっている。

II 現代のシドニーにおけるアボリジニ

今まで 1960 年代以降のシドニーのアボリジニの形成期を述べてきた。以下においては、今日のシドニーのアボリジニの特徴を検討していく。まずは 1986 年の国勢調査で見られた特徴を俯瞰図的に描き出す。その際には、できる限りの最新の資料を用いる。加えて類似の研究報告が他の都市でなされている場合には、それにも言及しながら進めていくことにする。

1 人口的特徴

表 1 は、1986 年当時のシドニーのアボリジニの人口・年齢構成および性別構成をまとめたものである。年齢区分が不均等なのはオーストラリア統計局から入手した地方自治体別統計資料に準拠しているためである。ニュー・サウス・ウェールズの都市アボリジニの人口規模は 5 万 9011 名で、シドニー在住者は、そのうち 32.8 パーセントに相当している。(但し、ニュー・サウス・ウェールズには ACT [オーストラリア首都特別地域] のアボリジニ人口も含まれている) 1960 年代の中頃のアボリジニ人口がわずかに 2000 名を越えた程度であったのを考えると、過去 20 年間の間の人口増加にはすぎましいものがある。また、それ故いくつかの疑問を生じさせているが、それらについては後述する。

ところで、アボリジニの人口構成は、一般的に、若年層の極端に高い割合と老年層の低さが指摘されている [ABS 1971, GALE 1972, 1982, BEASLEY 1970, WESTERN 1983, 鈴木 1986, 小山 1988 その他]。この傾向は、シドニーの外周を形成するアボリジニ人口の高いある地域を対象にした資料では、依然として若年層の人口が、高いピラミッド型が示されている [PEAT MARWICK HUNGERFORDS MANAGEMENT CONSULTANTS 1989]。都市

表 1 シドニー地域の人口 (人)

年齢	男	女	計 (%)
0-4	1313	1365	2678 (13.8)
5-14	2265	2911	5175 (26.6)
15-19	1234	1208	2442 (12.6)
20-39	3049	3284	6333 (32.6)
40-59	1010	1231	2241 (11.5)
60以上	221	338	559 (2.9)
	9072	10337	19428 (100.0)

[出典] 1986 年国勢調査地方自治体統計資料 (オーストラリア統計局) より改変

注: トレス・ストレート・アイランダーを含む

民化しているアボリジニもその意味で特徴的なのである。

次に、男女比を見てみると、わずかつつではあるが女性の方の絶対数が多いことが分かる。これは都市部のアボリジニ人口に関してはオーストラリア全体で確認できる傾向である。これに関して 1980 年にアデレードでアボリジニの社会経済問題を調査したゲイルは、調査では男性の場合、住所不定の可能性が高いのに対して、女性の場合は男性よりも都市での生活にチャンス（結婚・住宅）の多い可能性があると推測している [1982: 26-27]。しかし、これはあくまでも推測であって、本当のところは実際には分かっていないのが事実である。シドニーに関しても同じである。

ところで、都市部のアボリジニの一家族あたりの構成員数は、シドニーでは 4～5 名が平均となっている (PEAT MARWICK HUNGERFORDS MANAGEMENT CONSULTANTS 1989)。これは、アボリジニの核家族化を物語っているように思われるが、同時に注目しなければならないのは、アボリジニは両親がそろっている家庭よりも、母親のみあるいは父親のみという家庭の割合が高いことが上げられ、この傾向は都市で強い [GALE 1982: SMYTH 1989: 24]。これを、婚姻という視点からみると、白人と比較した場合次の事柄を指摘できる。婚姻率が低いこと、婚姻の起こるのが若年齢期であること、離婚率の高いこと。正式な結婚である場合は少ないという。

ここで指摘した 4 つの点は、アデレードでの調査や 1986 年の国勢調査による全国的結果に基づくものであるが、コスモポリタンなシドニーにおいては、これらの特徴が現われていないはずがないのである。

[社会・経済的地位]

アボリジニが社会・経済的にオーストラリア社会の底辺に位置していることは、一般的事実として認識されている。彼らはどの民族と比較しても就職できる可能性が低く、極端に高い失業率を示し続けた [HENDERSON 1975, ROWLEY 1970, WESTERN 1983, 鈴木 1986]。彼らに就職の可能性が見えだしたのは、つい最近のことで、それも公務員を中心としたものであった。例えば、1966 年の国勢調査では管理職・専門職・準専門職に就いているアボリジニの数は、全国で 50 名 [ABS 1966: 17] しかいなかったのが、1986 年の国勢調査では、シドニーに西部地域だけでその 4 倍を越えているのである [PEAT MARWICK HUNGERFORDS MANAGEMENT CONSULTANTS 1989.]。さらには、私企業でもここ数年積極的な雇用策を採用し、アボリジニの雇用枠を設けたり、拡大したりしている（例えば、カンタスオーストラリア航空）。こうした、積極策を打ち出した企業では、採用担当者にアボリジニ社員を配置したりもしている。もちろん、アボリジニ以外の人口との比較をした場合、アボリジニが不利である状況は依然として明かである。しかし、着実な改善が進行しているのも事実なのである。

表2 年間個人所得（週給）アボリジニ人口の高い地域の一例

所 得	男	女	計
\$ 9000以下 (\$ 172以下)	152	296	448
\$ 9001 - \$ 15000 (\$ 173 - \$ 287)	87	85	172
\$ 15001 - \$ 22000 (\$ 288 - \$ 421)	79	45	124
\$ 22001 - \$ 32000 (\$ 422 - \$ 613)	17	5	22
\$ 32001 - \$ 40000 (\$ 614 - \$ 766)	—	—	—
\$ 40001以上 (767以上)	—	—	—
無回答	43	55	98
計	379	486	864

[出典] PEAT MARWICK HUNGERFORDS MANAGEMENT CONSULTANTS 1989

表3 年齢による最終学歴（実数）アボリジニ人口の高い地域の一例

	15-24歳			25-49歳			50歳以上			計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
最終学歴と なった年齢												
13歳以下	1	1	2	2	3	5	1	5	6	4	9	13
13-16	71	101	172	140	150	290	49	49	98	260	300	560
17-18	30	31	61	23	21	44	—	—	—	53	52	105
19歳以上	—	—	—	6	4	10	—	—	—	6	4	10
在学中	15	17	32	—	1	1	1	—	1	16	18	34
就学経験なし	—	1	1	1	6	7	2	—	2	3	7	10
無解答	23	24	47	33	30	63	7	20	27	52	74	126
計	140	176	314	205	215	420	60	69	134	394	464	858

[出典] PEAT MARWICK HUNGERFORDS MANAGEMENT CONSULTANTS 1989

社会・経済的な観点には、職業の他、所得および教育レベルも含まれている。それらは、以下の表2と表3にまとめることができる。これらの表はABSの国勢調査の中から、シドニーのアボリジニ人口の高い地域のサンプルである。アボリジニの所得は、必ずしも高くないのは表からも読みとることが可能であろう。

教育レベルも、アボリジニ以外の人口の高等学校への進学率が40パーセント前後に対して、アボリジニの場合10パーセントであるのは、やはり両者に差のあることを物語っている。しかし、職業と同じくアボリジニ同士を時系列的に比較した場合、若い世代ほど教育を受ける期間が長くなっているのは明かであり（表4）、教育に関してのアボリジニの意識の変化を窺うことができるのである。

例えば、現在集計過程ではあるが、教育省係官が指摘したのは、オーストラリアの各大学でのアボリジニ学生の増加であり、さらに、TAFEと呼ばれる教育機関でのアボリジニ教師の数と受講生の増加である。こうした事実は、オーストラリア社会の底辺の位置を甘受し

表4 家庭内における日常使用言語 5歳以上 実数(%)

州名	英語のみ	アボリジニ言語	そ の 他	計
NSW	48,813 (96.5)	568 (1.1)	1,201 (2.4)	50,582 (100)
VIC	10,205 (94.0)	243 (2.2)	413 (3.8)	10,861 (100)
QLD	44,239 (83.6)	4,565 (8.6)	4,083 (7.7)	52,887 (99.9)
WA	23,595 (72.7)	7,660 (23.6)	1,186 (3.7)	32,441 (100)
SA	9,018 (73.6)	2,598 (21.2)	641 (5.2)	12,257 (100)
TAS	5,700 (98.3)	9 (0.2)	89 (1.5)	5,798 (100)
NT	7,780 (26.0)	20,402 (68.2)	1,731 (5.8)	29,913 (100)
ACT	1,000 (94.6)	33 (3.1)	24 (2.3)	1,057 (100)
オーストラリア	150,350 (76.8)	36,078 (18.4)	9,368 (4.8)	195,796 (100)

[出典] SMYTH, R. 1989

てきたアボリジニたちが、社会進出の方法を見いだした結果と考えてもよいでないだろうか。

[住居地域]

今日、シドニー地域のアボリジニ地区というとレッドファーン (Redfern) 地区がすぐ思い浮べられる。だが、実際のところこの地区のアボリジニ人口は高くなく、逆に郊外地域にアボリジニ人口が拡散している。そして、市街地の地域では持ち家の比率は低く、民間の賃貸住宅が多数を占めているのに対して、ある郊外地域では31パーセントは既に所有しているかもしくは購入中の個人住宅となっている [PEAT MARWICK HUNGERFORDS MANAGEMENT CONSULTANTS 1989]。これは、ビーズレイの指摘した1960年代の傾向が依然として続いていることを物語っている。

[都市アボリジニの言語]

国勢調査では、アボリジニの人々が話す言語についての資料が含まれている。州別資料であり、残念なことに地域別にはなっていないし、言語名は記されていない。その資料を援用したのが、表4である。明かに、地方に住むアボリジニ人口が高い州ではアボリジニ言語を話す人々の割合が高くなっている。しかし、シドニーを州都とするニュー・サウス・ウェールズでは、ほぼ全アボリジニ人口が英語のみしか話さないということが分かる。都市部のアボリジニの場合この傾向は強まることはあっても、その逆に考えにくいだろう。

[近年の都市への移動]

さて、以上の項目にわたり、シドニーのアボリジニの俯瞰図を考察してきた。ここで考察したシドニーのアボリジニは、キャストレスの分析によれば、1981年と1986年の国勢調査における人口の地域移動は無視し得るほどわずかなものであり、きわめて安定的であるとい

う [CASTLES 1989: 12]. ということは、Ⅱで紹介したシドニーのアボリジニは、既に都市に安定化しているといっても構わないという結論が出せそうである。

もちろん、都市へのアボリジニの移動が停止しているわけではない。キャストレスの指摘しているように、アボリジニの人口分布に大きな影響を与えるほどではないにしても、アボリジニの都市への流入は脈々と続いているのである。

それは、例えば、レッドファーンのアボリジニ人口は、ある調査では 200 人に満たず [SARKISSAN, JAMES and LLYOD 1986], 1986 年の国勢調査では 100 人以下なのである [PEAT MARWICK HUNGERFORDS MANAGEMENT CONSULTANTS 1989]. ところが、この地域の住民からは、アボリジニ人口は 500 人前後であるとの非公式の推定もなされている。そして、そのうち 30 パーセントが「安定」しているといわれている。このことはとりもなをさず、依然として地方からのアボリジニの流入が続いている証拠である。

筆者自身、最近の調査中にレッドファーンのある通りに面した廃屋になった倉庫には、寝袋ばかりが 30 以上も並べられ数名の男性がその建物の前でたむろしているのを目撃している。さらに、同じく調査中に西オーストラリア州のキンバリー地域から出てきたばかりの青年に出くわしている。こうした人々が、なぜシドニーへ流入して来るのかははっきりとしていない。単にシドニーを訪問しているだけなのか、あるいは就職目的なのかもしれない。いずれにしても、一時的な滞在者の数はかなり大きいのではないかと考えられる。

比較的はっきりした目的を持って都市へ移動して来るのは、シドニーにある諸教育機関で学ぶため学生としてシドニーへ移動して来ることである。オーストラリア最大の都市であるシドニーは、1950 年代半ば過ぎに他のどの州にも先駆けてアボリジニの手によって運営され始めたコミュニティ・カレッジが存在しているうえ、他のどの都市よりもさまざまな教育機関が存在しているのである。そのため、あらゆる教育機会を求めて、ニュー・サウス・ウェールズ州内だけに留まらず、他の州からも多くのアボリジニがシドニーへ流入してきているのである。

教育機会を求めてシドニーへやってきた人々は、学業を終える人々もいれば、志し半ばにするものもいる。いずれにしても、地元に戻ったり、あるいはシドニーに残り、シドニー市民として新しい生活を始めることになる人々もいる。その数は、一時的滞在者と同じく、正確には把握できない。

コスモポリタン、シドニーは常に人を引き寄せ、そしてその街を捨てる人々と、その街に好んで居残る人々とまた否応なく生活せざるを得ない人々などのように、種々雑多な人間の混成を生みだしているのであり、それらの人々の中にアボリジニも入っているのである。

Ⅲ ま と め

1986年の国勢調査の資料を中心に、シドニーのアボリジニの俯瞰図をまとめた。第二次世界大戦中に採用されながらも、戦争のせいでうまく実施されず、最終的には戦後に本格化した同化政策がアボリジニ政策として採用されて以来、都市でのアボリジニ人口は着実に増加を示し、都市での存在感を増している。そして、アボリジニの都市への移動は近年も依然として続いていることが分かる。

しかしながら、同時に都市でのアボリジニ人口の増加の仕方にはいくつかの疑問を投げかけざるを得ない。それらの疑問は相互に関連しあっていると考えている。ここでは、その疑問を紹介し本稿のまとめに代え、後日の考察の手がかりとしたい。

都市のアボリジニ人口を考察して、最も不思議なのは都市でのアボリジニ人口の増加が不自然すぎることである。例えば、表5は1971年以降の国勢調査に基づき、アボリジニ人口を都市と地方に分けたものである。

一般的に、アボリジニの人口を扱う際にはパーセンテージによって示されるのが普通なのであるが、本表では実数とパーセンテージで表している。その理由は、パーセンテージだけで示した場合地方在住のアボリジニの割合は、絶対数は増加しているにも関わらず、アボリジニ全人口が急激に増加しているため極端に低下しているからである。そしてその事実から、アボリジニの都市への移動を指摘するむきがある。

しかし、表5の実数に着目した場合、地方の人口は比較的安定し、かつ人口学的にも自然増を反映した状態であることが分かる。しかし、既に述べたようにアボリジニ人口の都市への流入は依然として続いているのは、筆者調査中でも間違いがないが、地方に居住するアボリジニの状況は、都市での人口がこれほど増加し得るほど人を送り出す条件が整っていると

表5 アボリジニ人口—地域別実数(%)

地域	1971 国勢調査		1976 国勢調査		1981 国勢調査		1986 国勢調査	
	%		%		%		%	
主要都市	17,332	(14.9)	42,187	(26.2)	31,546	(19.7)	55,537	(24.4)
地方都市	34,076	(29.4)	53,669	(33.4)	61,793	(38.6)	95,879	(42.1)
地 方	64,545	(55.7)	65,059	(40.4)	66,558	(41.6)	76,226	(33.5)
計	115,953	(100.0)	160,915	(100.0)	159,897	(100.0)	227,645	(100.0)

[出典] AUSTRALIAN BUREAU OF STATISTICS

1971 *Census of Population and Housing, Aborigines*

1976 *Census of Population and Housing, Racial Origin*

1981 *Census of Population and Housing, Racial Origin*

1987 *Census 86: Aborigines and Torres Strait Islanders: Australia, States and Territories* より改変。

() 内は%。トレス・ストレーツ・アイランダーを含む

は考え難い。

第一、1960年代から1970年代の終わりまでの間にアボリジニ人口の自然増加率が低下していることが報告されている〔GRAY and SMITH 1983: 7〕上に、乳幼児死亡率が低下しているといっても〔ABS 1987, THOMSON 1983: 10〕それは、地方のアボリジニ人口の増加に反映されていると考えるべきである。

急激なアボリジニ人口の増加に関しては、さまざまな解釈がなされている。確かに、1966年の国勢調査の後、国民投票が実施されアボリジニは初めて国勢調査の正式な対象となった。それ以前はまともな調査をせず、地方の係官が人口の報告をしていたのである。

そして、1971年以降の国勢調査では、アボリジニの定義がそれ以前の「50%以上アボリジニである」から変更され、自己申告になったのである〔CHOI and SMITH 1985, JORDAN 1985, 鈴木 1986〕。そのため、アボリジニ人口が急激に増加したとも言われていたが、それで十分な説明とは考えられない（国勢調査のアボリジニの定義について詳しくはCHOI and SMITH 1985 参照）。

第一、1976年の国勢調査で16万人を越えたアボリジニ人口は、その5年後の1981年には15万人となり、さらに1986年になると23万人に迫る勢いを見せているのである。このような矛盾した変動は、そのつど、オーストラリア国内で論議をもたらした。オーストラリア統計局では、国勢調査の度にその正確さをアピールした〔SMYTH 1989〕。

それにしても、1976年の国勢調査と1981年の国勢調査にみられる人口減少は説明できない（1981年の国勢調査は社会福祉給付金の支給された週に実施されたため、用紙の回収が十分でなかったと述べるに求める人もいる〔SMYTH 1985 参照〕）。

1981年の人口統計よりも1.4倍以上の増加を示した1986年の国勢調査では、事前の集中的広報効果が潜在していたアボリジニ人口を掘り起こしたのが原因であると言う説明を行っている〔CASTLES 1989〕。もちろんそうした準備が効果を発揮したのは間違いないだろう。が、それ以上に、既に示した表から明かように、アボリジニ人口の増加は都市部での人口増加に根本的な原因を求めることができるのである。つまり、急激なアボリジニ人口の増加は国勢調査において、都市部に住みアボリジニであることを1986年の国勢調査まで自己申告しなかった人々が、自分の出自を進んで明らかにした結果と言えるのである。

労働党政権でのアボリジニ省担当大臣のハンド氏は、「この増加は、人種主義や差別的態度が次第に消滅するにつれ、人々がアボリジニあるいはトーレス・ストレイト・アイランダーであることを進んで認めるようになったことに理由を求められるだろう」〔Media Release 1987〕と述べ、社会の政治的状況にその原因を求めている。

さらに、小山は、「これは自然増だけでなく、アボリジニ対策の強化によって、アボリジニであることが有利であることが分かったため、それまで態度を決定していなかったアボリジニ系白人の人口がアボリジニ側へなだれ込んだ結果だと考えられる」〔小山 1989: 57〕と

いう。恐らく、2つの説明は各々単独で用いるより、併せて用いるべきであろう。

調査中、比較的共通した言葉として、多くの、それも政治活動を積極的に行っている人だけでなく市井の人（アボリジニ）でも「数年前だったら、アボリジニの人々は自分からアボリジニとは言い出せなかっただろう」と述べるのを耳にした。

これは、彼らの内にそれなりの自信がなければ発せられることのない言葉のように思われる。なぜならば、既に述べたことであるが、アボリジニの社会的・経済的地位が以前よりかなり改善され、自分からも改善するために働きかける受容度が社会全体で増している。とはいえ、非アボリジニ人口と比較した場合、アボリジニと呼ばれる人々が依然として不利な立場に立たされていることは余りにも明白である。そうした不利な状況にもかかわらず、彼らが、自己申告によってアボリジニであることを自覚し、それを進んで口にできるようになっている。

都市のアボリジニの俯瞰図が、ある程度見えた今、今度はアボリジニに関わりのある分野で、オーストラリア社会がどのような経過を経てきたのか考察する必要があるのではないだろうか。それが、都市でのアボリジニ人口急増の疑問を解く鍵の一つであるように思われる。それは、アボリジニ以外のオーストラリア社会では絶対多数者である側からの働きかけとアボリジニ側からの働きかけの二面を含んでいるのは当然である。それについては、別の機会に譲ることにし、都市アボリジニの一面の紹介に関しては以上にとどめたい。

参 考 文 献

AUSTRALIAN BUREAU OF STATISTICS

1966 *The Aboriginal population of Australia*

1971 *Census of Population and Housing, Aborigines*

1976 *Census of Population and Housing, Racial Origin*

1981 *Census of Population and Housing, Racial Origin*

1987 *Census 86: Aborigines and Torres Strait Islanders: Australia, States and Territories*

1989 *Census of Population and Housing, CENSUS 86, Data Quality Aboriginal and Torres Strait Islander Counts*

BARWICK, D

1962 "Economic Absorption Without Assimilation? The case of some Melbourne Part-Aboriginal Families" *Oceania* 33 (1) 18-23

BEASLEY, P.

1975 "The Aboriginal Household in Sydney" in TAFT, R., DAWSON, J.L.M. and BEASLEY, P. *Attitudes and Social conditions, Aborigines in Australian Society* 2, A series sponsored by the Social Science Research Council of Australia, Australian National University Press, Canberra

BELL, J.

1961 "Some Demographic and Cultural Characteristics of the La Perouse Aborigines," *Mankind* 5 (10) 425-438

CASTLES, I.

1989 *Census of Population and Housing, 30 June, 1986: Census 86: Data Quality—Aboriginal and Torres Strait Islander Counts*, Australian Bureau of Statistics, Catalogue No. 2602. 0

CHOI, C. Y. and GRAY, A.

1985 *An Evaluation of Census Counts of the Aboriginal Population, 1971, 1976 and 1981*, Australian Bureau of Statistics, Occasional Paper No. 1985 / 2

GALE, F.

1972 *Urban Aborigines*, Australian National University Press, Canberra

GALE, F. and Wundersitz, J.

1982 *Adelaide Aborigines: A case study of urban life 1966–1981: the Aboriginal component in the Australian economy*, Development Studies Centre, Australian National University, Canberra

GRAY, A. and SMITH, L. R.

1983 "The size of the Aboriginal Population" *Australian Aboriginal Studies*, no. 1 : 2–9

HENDERSON, R. F. (ed)

1975 *Poverty in Australia, Commission of Inquiry into Poverty, First main report*, Vol. 1, April 1975, Australian Government Publishing Service, Canberra

JORDAN, D. F.

1985 "Census categories—enumeration of Aboriginal people, or construction of identity?" *Australian Aboriginal Studies*, no. 1 : 28–36

小山修三

1988 「オーストラリア・アボリジニ社会再編成の人口論的考察」『国立民族学博物館研究報告』13 巻1 号: 37–68

1990 「アボリジニ（オーストラリア）——近代化と伝統への回帰」『文化人類学』77, vol. 6 (1) 49–61

ランバート, カーメン

1988 「カナダ都市部における原住民のエスニシティ」, 綾部恒雄 (編) 『カナダ民族文化の研究——多文化主義とエスニシティ』刀水書房, 東京

MINISTER FOR ABORIGINAL AFFAIRS

1987 "More Australians Identify as Aborigines and Torres Strait Islanders" *MEDIA RELEASE*, 1 October, 1987

PARBURY, N.

1986 *Survival: A history of Aboriginal life in New South Wales*, Ministry of Aboriginal Affairs, Sydney

PEAT MARWICK HUNGERFORDS MANAGEMENT CONSULTANTS

1989 *Research Project Report: Aboriginal Community Measurement of Socio-Economic Development*, commissioned by the Office of Aboriginal Affairs, New South Wales, July, 1989

PERKINS, C.

1987 *A Bastard like me*, Lansdowne-Rigby (邦訳 中野不二男『黒い私生児チャールズ・パーキンス』くもん出版, 東京)

ROWLEY, C. D.

1970 *The Destruction of the Aboriginal Society*, Australian National University Press (参考は Pelican Books 版 1972)

SARKISSAN, W., JAMES, C. AND LLYOD, R.

- 1986 *Housing for Aboriginal People in Redfern*, A report to the Board of the Aboriginal Housing Company, Sydney
- SMITH, HEZEL, M. and BIDDLE, E.
1967 *Look forward, not back: People of Aboriginal descent living in the metropolitan area of Brisbane*, Aborigines in Australian Society, Australian National University Press, Canberra
- SMYTH, R.
1989 *The Aboriginal and Torres Strait Islander Population*, Research paper no. 4, Royal Commission into Aboriginal Deaths in Custody, February, 1989
- STEVENS, F. S. (ed)
1972 *Racism: The Australian Experience, A study of race prejudice in Australia*, vol. 2 Black versus White, Taplinger Publishing Company, New York
- 鈴木清史
1986『アボリジニー：オーストラリア先住民の昨日と今日』 明石書店、東京
- THOMSON, N.
1983 "Aboriginal infant mortality 1976-1981" *Australian Aboriginal Studies*, no. 1 : 1-15
- WESTERN, J.
1983 *Social inequality in Australian society*, Macmillan, Melbourne

Aboriginals in Sydney :

their emergence and contemporary demographic characteristics

Seiji Suzuki

In the past few decades, there has been a sharp increase of the Aboriginal population in areas classified as major urban or urban. The 1986 Australian census shows that some sixty-six percent of all the Aboriginal people now live in such areas in one form or another. Truly, it is possible to say that Aboriginal people have been city dwellers since the beginning of the British colonization, but the majority of them had been traditionally rural residents. It is, therefore, noteworthy that more than half of the total Aboriginal population can be seen in city areas, and then they now offer a new perspective to the Aboriginal society in Australia as a whole.

In this paper, the first section, citing past literature available, reviews the movement of the Aboriginal people to an urban area, namely, Sydney, the capital city of New South Wales, and the Australia's largest city. And then, in the second section, it is intended to elucidate today's demographic characteristics of nearly 20,000 Aboriginal people in Sydney.

One of the features about Sydney Aboriginal population is that the recent increase of the Aboriginal population is not due to the migration of rural people to the city but largely to changing attitudes of the Aboriginal people towards the general society and themselves, as well. To put it differently, while the rural Aboriginal population has been steadily increasing, that of an urban area has literally skyrocketed. Various explanations can be attached to this phenomenon. The surest one must be that Aboriginal people now find it much easier to identify with Aboriginal than ever.

Another thing to be noted is that the Aboriginal population is spread out throughout the metropolitan area. It means that although many of them are still socially disadvantaged, Aboriginal people are not necessarily residents of a so-called ghetto as generally imagined. It is quite clear that they are now on upward social mobility, albeit slowly.